１　主題構成表

主題名　「真の友情」（中学校第２学年）　　**資料名「嵐の後に」**

内容項目２－（３）

友情の尊さを理解して心から信頼できる友達をもち、互いに励まし合い、高め合う。

■　内容項目から見た生徒の実態

（意識）

・仲のよい友達はいるが相手や自分の思いとおりになる関係であることが、よい関係だと思っている。

・友達がよくない行為をしていても、相手のために本気になって注意することができない。

（要因）

・友人関係が壊れてしまうことに怖さを感じているため、よくない行為に対して注意することができない。

・相手のために忠告したり、励ましたりすることが、相手や自分の成長を促し、信頼関係を育てる一歩であることに気付いていない。

■　価値の分析

・真の友情は、互いに変わらない信頼があって成立し、相手に対し尊敬する気持ちがその根底にある。それは、相手の人間的な成長を願い、互いに励まし合い、高め合い、協力を惜しまないという関係である。

・中学生の時期は、互いに心を許し合える友達を真剣に求めるようになり、心から打ち明けて話せる友達を得たいと願う気持ちが高まってくる。しかし、相手に同調したり、最初から一定の距離をとったりする生徒も出てくる。

・この時期の生徒たちには、視点を広げ、生涯にわたる尊敬と信頼に支えられた友情を育てることが大切である。そのために、相手の内面的なよさに目を向け、相手の成長を心から願って互いに励まし合い、忠告し合える信頼関係を育てることが、より一層深い友情を築くことに気付かせたい。

■　資料の分析

・子どもの頃から何でも話し合える仲だった勇太と明夫だが、高校生の頃から関係がぎくしゃくしてくる。漁師見習いとして二人が乗った船が嵐に襲われたことをきっかけに、二人の友情が確かなものとなる。

・明夫のことを心配し一緒に働きたいと思っている勇太の気持ちに共感させることができる。

・明夫に何も言えず、明夫のことをあきらめかけている勇太の気持ちに気付かせることができる。

・今まで明夫の気持ちを考えようともしなかった自分のことを振り返り、明夫と心が通い合って喜ぶ、勇太の気持ちから、本気で相手のことを思うことが真の友情を深めることにつながることに気付かせることができる。

■　ねらい

相手のことを考え、本当に必要な関わり方をすることが、信頼関係を築き友情を深めることに気付き、互いに励まし合い、高め合おうとする心情を育てる。

■　展開の構想

・明夫のことを心配し、一緒に船で働きたいと思っている勇太の気持ちに共感させる。

・明夫のよくない姿が分かっていても何も言えず、明夫のことをあきらめかけている勇太の気持ちに気付かせる。

・今まで明夫の気持ちを考えようともしなかった自分のことを振り返り、明夫と心が通い合って喜ぶ、勇太の気持ちから、本気で向き合うことが互いの友情を深めるために必要であることに気付かせる。

・今までの自分と友達との関係を振り返り、互いが成長するために信頼し合い、高め合っていこうとする意欲をもつ。

■　基本発問（◎中心発問）

○「船に乗らんか」と言った時の勇太はどんな気持ちだっただろう。

○なぜ、勇太は明夫に面と向かって何も言えないのだろう。

◎「明夫、今までどこで何やっとったんよ。待っとったんぞ。」と言った時の勇太の気持ちはどんなだっただろう。

○友達のことを思って行動したことはありますか。その時どのような気持ちでしたか。

２　学習指導過程

	基本発問と予想される生徒の反応	指　導・援　助
導入	◇友情についての価値への方向付けを図る。 **〇親友とはどういう関係をいうのだろう。** ・何でも話せる関係。 ・自分のことを分かってくれる関係。	・仲の良い友達との関係を想起させ、日頃の友達関係と比べながら資料を聞くことができるようにする。
展開前段	◇資料提示（教師の読み聞かせ）をする。 **〇感想を交流する。** ・自分の命に代えても明夫を守ろうとした勇太は本当に明夫のことをずっと友達だと思っていたんだ。 ・最後には勇太と明夫が分かり合えてよかった。 **〇「船に乗らんか」と言った時の勇太はどんな気持ちだっただろう。** ・明夫と一緒に働きたい。 ・また、仲がよかったときのような関係にもどれるかもしれない。 ・これで明夫の生活態度が変わるといいな。 **〇なぜ、勇太は明夫に面と向かって何も言えないのだろう。** ・今更何て言えばいいのか分からない。 ・何かを言うことで明夫が船を降りてしまうのは嫌だ。 ・このままでもいいから明夫と一緒に働きたい。でも、本当にこのままでいいのか・・・。 ・言っても仕方がない。 ・いつか明夫が気付くかもしれないから、今は何も言わないでおこう。 ・今まで明夫をほっておいた責任を感じている。 **◎「明夫、今までどこで何やっとったんよ。待っとったんぞ。」と言った時の勇太の気持ちは、どんなだっただろう。** ・やっと言えた。明夫も待っていたんだ。もっと早くこの言葉を言えばよかった。 ・明夫が待っていてくれたことが嬉しい。 ・これからは、どんな時も明夫と一緒に漁師の仕事を頑張っていこう。 **【深めの発問】** **勇太の言葉は明夫を傷つけることになり、二人の友情は壊れてしまうのではないか。** ・勇太の言葉で関係が壊れるようなら本当の友達ではないし、勇太は明夫なら分かってくれると思って言った。 ・明夫に対して、本気で言うことが、友達を本当に大切にしていることだということに勇太は気が付いたから、言いにくいことでも言えたと思う。	・どの場面に着目したかつかみ、勇太の気持ちを中心に発問につなげ、意図的指名に生かす。 ・明夫のことを心配し、一緒に働くことで、明夫との関係がもとに戻れるかもしれないと思っている勇太の気持ちに共感できるようにする。 ・明夫のよくない姿が分かっていても、今まで何も言ってこなかったのに、今更何を言っていいのか分からない、焦りともあきらめともいえる勇太の気持ちに共感できるようにする。 ・今まで明夫の気持ちを考えようともしなかった自分のことを振り返り、明夫と心が通い合って喜ぶ、勇太の気持ちに気付くようにする。 **●言語活動の充実** 勇太と明夫の友情についての話合いを通して、多様な感じ方や考え方に接し、自分にはなかった違う視点からの価値について気付かせ、感じ方や考え方を深める。 ・友達のことを本当に大切にしているということは、相手のよくない行動にも真剣に考えて言い合えるということであり、そのことが相手の成長を願い、さらには友情を深めることにつながっていくことに気付くようにする。
展開後段	**〇友達のことを思って行動したことはありますか。その時どのような気持ちでしたか。** ・仲のいい友達が、委員会の常時活動を遊びたいからという理由で、他の子に無理に代わってもらおうとしていたから、迷ったけど注意した。友達は分かってくれてその後、委員会の活動をしっかりとやっているので、言ってよかったと思う。	・これまでの自分と友達との関わり方について振り返り、互いに信頼し合い、高め合うことの意欲をもたせる。
終末	◇「私たちの道徳」の詩Ｐ60 を範読する。	・友達を思い浮かべながら詩を聞くように促す。

３　道徳の時間（本時）と他の教育活動との関連

＜場の内容・ねらい＞

＜学級活動＞
「学級目標を考える」
・相手の立場を考えた言動が、自分たちの学級をよりよくすることをみんなで共通理解し、学級目標を考える。

＜宿泊研修＞
・仲間と共に行動する中で、仲間のよさを再認識する。
・相手の立場に立った言動が、だれにとっても気持ちよく活動することにつながることを実感することができる。

道徳の時間（９月）
「夏の日のこと」
内容項目２－（２）
・相手のことを考えて行動すると、お互いに気持ちがよくなることに気付き、だれに対しても思いやりに気持ちを持ち、進んで相手に親切にしようとする心情を育てる。

＜総合的な学習の時間＞
「福祉施設との交流会」
・地域のお年寄りの方との交流を通して、相手の立場に立って行動することの大切さを実感することができる。

【日常の活動】
＜登校時＞
・低学年の歩く速さに合わせたり、声をかけたりしながら気持よく登校することができる。

＜朝の会＞
「１日の目標づくり」
・お互いが気持ちよく生活できるように、仲間のことを考えて生活することを確認する。

＜給　食＞
・重い食器を運ぶ仲間に協力したり、こぼして困っている仲間に手を差し伸べたりしながら、みんなが楽しい給食の時間にする。

＜係活動＞
・仲間のことを考えて呼びかけたり、仲間の気持ちを考えて行動したりすることができる。

＜帰りの会＞
「かがやきみつけ」
・今日見付けた仲間の温かい言葉や行為について認め合う。

＜児童の意識＞

・お互いのことを大切にし、だれとでも支え合いながら温かさがあふれる学級にしていきたい。

・仲間のことを考えて進んで行動できるかな。
・自分が困っているときにみんなが声をかけてくれてうれしかった。今度は、自分が声をかけられるようになりたい。

・思いやりのある行動は相手だけでなく、自分も気持ちがよくなるんだ。
・仲のよい友達だけではなく、だれに対しても親切にすることができるようになりたい。

・初めて会う人たちと、うまく交流できるかな。
・お年寄りの方から「ありがとう」とお礼を言われて、自分もうれしい気持ちになった。

＜指導・援助＞

・だれもが安心して気持ちよく生活ができる学級にするために、相手の立場に立って考え、行動できるようにする。

・１日の振り返りの時間に、研修の中で感じた思いやりの気持ちを伝え合う場を設ける。
・学級生活の中で児童の具体的な言動を紹介し、仲間を気遣う気持ちを行動に移すことのすばらしさを実感できるようにする。

・困っている時には、だれに対しても親切にすることのよさを実感させる。
・日常活動の中でつかんでいる児童のよさを価値付ける。

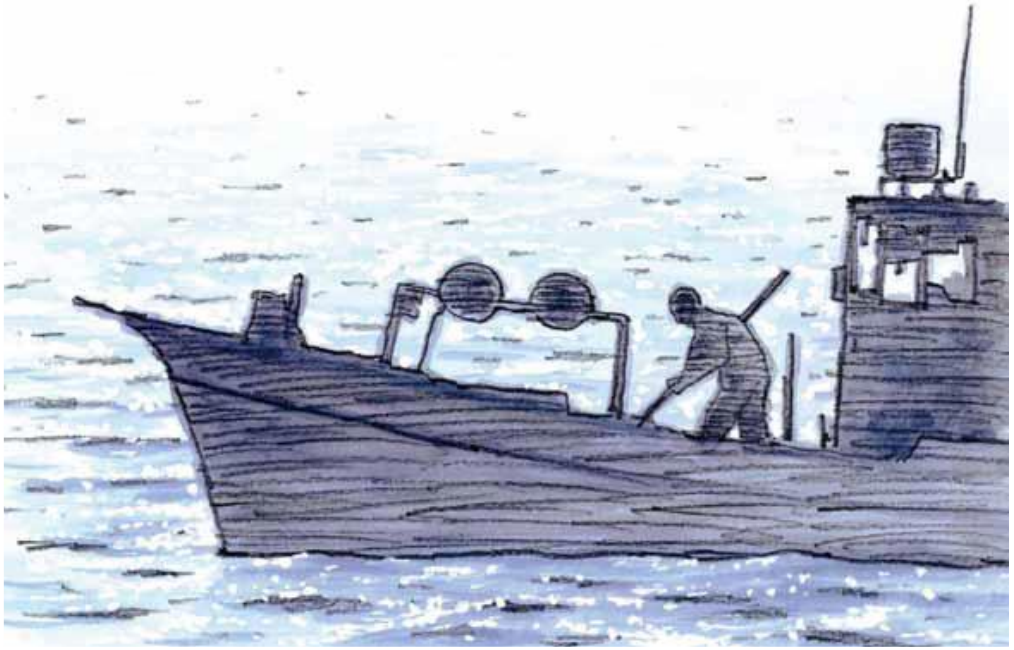
・福祉施設訪問での意識から、お年寄りの方の立場や気持ちを考えて行動することが相手を大切にすることになることを理解できるようにする。
・施設の方から「思いやり」について話を聞く。

嵐の後に

「ところでよ。お前んとこの明夫のことだけど、いったい今何してんだい。見たところ仕事もしてないみたいだけど、心配でなぁ。」
「ああ、困ったもんよ。わしも女房もあいつのことには、頭を悩ましているよ。まったく何を考えてるのか……清さんとこの勇太は、日に日にたくましくなっていくっていうのによ。」
「まあまあ、そう言うなって。なあ、明夫を俺の船に乗せてみんか。勇太とは、同級生だしよ。あいつも助かるだろうから。俺らの若い頃みたいによ。」
「そうは言ったって、清さんに迷惑掛けるのが目に見えとるしな。」
「何、水臭いこと言ってんだ、ガキの頃からの俺と信さんの仲じゃないかよ。」
親父たちのそばで漁具の手入れをしながら、黙って聞いていた俺は、親父のお節介がまた始まったと思いつつも、内心嬉(うれ)しかった。
同じ水産高校で学んだ親父たちは、卒業と同時に遠洋漁船に乗っていた。若かった頃の二人は、何ヶ月も家に戻れない厳しい漁場で互いに励まし支え合い、同じ釜の飯を食って一人前になったと聞いている。これまでの人生は、互いの存在なくしては語れないほどの仲だ。家庭を築いたのも息子を授かったのも、偶然、同じ年だった。それが、俺と明夫だ。
俺たちが高校生になった数年前、漁業の景気が悪化し始めたのをきっかけに、親父たちは遠洋漁船を下りた。それまでに貯めた金を頭金にして、親父は、小型船を手に入れ、今は、せがれの俺と近海で操業している。明夫の親父の信さんは、漁師料理を売りにした居酒屋を営み、店で使う鮮魚の仕入れに、毎朝、こうして魚市場に顔を出す。親父たちは、今だにどんな些細(ささい)なことも毎日のように語り合い相談し合っている。
明夫と俺は、親父たちと同じ水産高校の同級生だった。俺たちも子どもの頃からいつも一緒にいたし、何でも話し合える仲だった。だが、確か開店した居酒屋が忙しくなってきた頃からだったように記憶している。あの頃、時々遊びに行くと、明夫はいつも一人で飯を食っていた。そして、いつの頃からか、明夫は、俺を避けるようになり、派手な仲間と付き合うようになっていた。いつも大勢に囲まれ楽しそうにしている明夫が羨(うらや)ましかった。置いてきぼりにされたような気分になっていた。明夫と時々顔を合わせながらも、とりとめのない話をするばかりで、それをとがめることもできないまま、今まで来てしまっていた。
その夜、夕飯を済ませた俺は、親父の了解を得てから不安を抱えながらも明夫に会いに行った。
明夫は、突然の俺の訪問に驚いた様子だったが、以前のように自分の部屋に入れてくれた。ひとしきり同級生の話題で盛り上がった後、俺は、意を決して投げかけた。
「なあ、明夫、これから何か仕事の当てでもあるのか。」
「別に……。」
明夫の表情がこわばるのが見て取れた。俺は、なるべく明るい声で言った。
「だったらよ、うちの親父が、船に乗らんかってよ。実は、俺一人じゃきつくてよ。明夫が手伝ってくれると親父も俺も助かるんだ。」
「ああ……考えとく。」
明夫は、ぶっきらぼうな声で答えた。
水産高校を卒業したものの明夫は、就職する先が決まらず悩んでいた。だからといって親父の

仕事を継ぐという選択肢は、持ち合わせてはいなかった。同級生が仕事を決めていく中、焦りながらも、しばらくは市内のコンビニやレストランで働いていた。だが、接客という仕事が性に合わないのか、あろうことか客や店主とけんかになって、どこも長くは続かなかった。深夜まで遊んだり、おふくろさんに金をせびったり、安定しないふらふらした生活を続けていたのだった。

俺が訪ねて数日してから、明夫が漁師見習いになることを決意したことを親父から聞いた。早速、その夜から三人での出漁が始まった。しかし、期待していた通りにうまくはいかなかった。明夫が、少しでも怠けると即座に親父の罵声が飛んだ。怒鳴られる度に、明夫は、船べりのあちこちに拳を打ち付け、海に飛び込んでやるなどと無謀な怒りを声にした。黙々と慣れた手つきで仕事をしている俺をいまいましそうな表情で見ている明夫と目が合うこともあった。明夫の働きぶりは、総じて感心できるものではなかった。親父の姿が見えないところでは特にひどかった。俺は、最初は慣れないせいもあるからと思っていたが、操業用の道具の荒っぽい扱いや、雑な甲板掃除で汚れを残したままでも平気でいる明夫の態度が気になってきていた。明らかに俺の前では、やる気の無さを見せつけていた。俺はそれを分かっていながらも、面と向かうと何も言えなくなってしまい、仕方なくその後始末を請け負っていた。



ある日、そんな二人のぎくしゃくした関係に気付いていた親父が、俺に向かって言った。

「勇太、お前、明夫のことを本当に思っているなら、遠慮せずに思ったことを言ってやれ。仕事も一から丁寧に教えてやれ。上っ面だけで付き合ってるんじゃないぞ。明夫がこの先どうなってもいいのか。お前らそれでもガキの頃からの付き合いなのか。」

親父は、俺の心の内を見抜いていた。親父の言葉が、胸に刺さった。ずっしりと重い固まりを胸に抱えたまま、出漁の時が迫ってきていた。弓なりの月がぼんやりと辺りを照らしている穏やかな暁だった。明け方から北西の風が強まるという予報が出ていたものの漁場がそう遠くないこともあって、経験豊富な親父の決断に従った。

出港してから二時間足らずで、水深百メートルほどの漁場に着いた。海風が頬を突き刺す。ずっしりと重い網を引き上げる指先が、悲鳴をあげていた。ブリッジにぶつかる波が飛沫を上げ、時折、突風が駆け抜け始めた。夜明けともいえず立ちこめた真っ黒な雲の固まりから、突然、激しく雨が降り出した。やがて波のうねりは、ブリッジを越える高さにまで達し、船体は縦横無尽に揺れた。波が高いと、胃の縁が引っ張られ血液が逆流するような気分になる。明夫にとっては、

初めての時化だ。暴風に逆らいながら網を引き上げようとしているが、体が思うように動かないようだ。明夫のおぼつかない足さばきは、今にも大きな波のうねりの中に引きずり込まれそうだった。俺は、危険の大きさと一瞬の恐怖に戦慄が走った。俺は、思わず明夫の腕を掴んだ。

「明夫、何しとるっ。全身に力を入れろっ。」

俺の渾身の叫び声が、激しい雨音と共に明夫を我に返らせたようだった。

「ぐずぐずするなっ、波に飲み込まれるぞ。後は俺がやる、ブリッジに入れっ。」

明夫は、声を荒げる俺の指示に従った。網の引き上げを終えた俺は、ずぶ濡れになって中に入った。明夫は、暴風雨のさなか、狭いブリッジの壁に身体のあちこちをぶつけながら何度も吐いていた。俺は、その度に、明夫の背中をさすった。

「す、すまん。かっこ悪いな、俺。」

「何、謝ってるんだ。波に飲み込まれなくてほんと良かった。初めての嵐の時は、誰でもこうなんよ。俺なんか、もっと悲惨よ。」

「勇太、お前が羨ましかったんよ。俺らは、ずっと一緒やったやろ……。」

俺にとっては、意外な言葉だった。俺は、これまで明夫の心境を考えてみようともしなかった。明夫の表面だけを見て、それ以外の何も見ようとはしてこなかった自分が悔やまれた。今、まっすぐに明夫と向き合わなければならない。そう思うと、俺は、驚くくらいに素直な気持ちになれた。

「明夫、今までどこで何やっとったんよ。待っとったんぞ。」

「分かっとったよ。……、だから、戻ってきた、ここに。」

蒼白な顔の明夫が苦笑いをしながら言った。

やがて、風雨は弱まり船の揺れは次第に小さくなっていた。操舵室から親父の野太い声が上がった。

「おー、引き上げるぞっ。エンジン全開。明夫、大丈夫か。みんなお前とおんなじだ。俺もお前の親父もな。お前らも、いっちょ前になる通り道を通らんとな。」

そう言うと、親父は、大声で笑った。俺たちは顔を見合わせて、がっちりと手を握り合った。

西の空の棚雲の切れ間のあちこちから、光が波間に降りてきていた。

内容項目　二―（三）

出典　中学校道徳　読み物資料集

（平成二十三年三月　文部科学省）